

独身大学生男女が必要と考える保育サービス

出村 友寛¹⁾・出村 慎一²⁾・杉本 寛恵³⁾・松浦 義昌⁴⁾

内田 雄⁵⁾・川野裕姫子⁶⁾・高橋 憲司⁷⁾

仁愛大学人間生活学部¹⁾・金沢大学大学院自然科学研究科²⁾・同志社女子大学体育非常勤講師事務室³⁾

大阪府立大学高等教育推進機構⁴⁾・仁愛女子短期大学幼児教育学科⁵⁾・神戸教育短期大学こども学科⁶⁾

長崎国際大学人間社会学部⁷⁾

Childcare Services Regarded as Necessary by Unmarried Male and Female University Students

Tomohiro DEMURA¹⁾・Shin-ichi DEMURA²⁾・Hiroe SUGIMOTO³⁾

Yoshimasa MATUURA⁴⁾・Yuu UCHIDA⁴⁾・Yukiko KAWANO⁶⁾・Kenji TAKAHASHI⁷⁾

Jin-ai University¹⁾・Kanazawa University²⁾・Doshisha Women's College of Liberal Arts³⁾

Osaka Prefecture University⁴⁾・Jin-ai Women's College⁵⁾・Kobe College of Education⁶⁾

Nagasaki International University⁷⁾

本研究では18歳以上の独身大学生男女552名を対象に、必要と思われる保育サービス需要に関する性差を明らかにすることを目的とした。本研究は内閣府が実施した「保育サービスの質と評価」に用いられた12項目を用いて、対象者が観点1では、重要と判断する項目（第1～第5位）、そして観点2では、各項目内容について望む程度（5段階）の点から検討した。観点1において「延長保育」は男性では「園内の給食」および「午前中の軽食」、女性では「シーツや衣服の洗濯」以外の項目より順位が高かった。観点2において「延長保育」は、男女とも84%以上が望みかつ、女性が男性より多くが望んだ。結論として独身大学生男女が最も必要と考える保育サービスは「延長保育」であり、女性が男性よりも多くが望むと判断される。

キーワード：保育サービス，独身男女大学生，性差

I. 緒言

近年女性の就労率の上昇を背景に保育所入所者数は増加し、保育ニーズの多様化が見られ、延長保育、休日保育、幼児教育等の特別保育に対する要望が高まっている（厚生労働省，2015）。これまで保育サービス需要に関する調査は、主に就学前児童がいる両親を対象に実施されてきた。女性の社会進出の増加により保育サービスは、ますます需要増加が見込まれているが、特に都市部では高コストが原因で供給不足が深刻になっている（内閣府国民生活局物価政策課，2003）。調査結果によると、保護者は「病気時の保育」および「病後児保育」サービスを最も必要とし、「育

児支援」「苦情処理」等のサービスも必要としている（清水谷と野口，2004）。阿部と若林（2014）は、市町村合併による0歳および1歳児の入園の増加に伴い土曜・休日保育や延長保育のニーズが高まることから、保育士を増やす必要性があると報告している。

一方、独身若年者は、まだ子どももいないので子育ての実感や保育サービスの自覚に乏しく、また就学前児童がいる保護者とは生活状況も異なり、保育サービスに対する意識や考えも異なると考えられる。子育て世代でない独身若年者が必要と考える保育サービスを把握することは、独身若年者の視点から現代社会の保育サービスのニーズを客観的に知ることができ、男女

それぞれの立場で働きながら子育てしやすい環境を構築するための基礎資料になるであろう。

これまで独身若年者の保育サービスに対する意識調査は、ほとんど報告されていない。厚生労働白書(2013)は、若い世代で未婚・晩婚が増えている理由として、男性では「経済的に余裕がないから」に対し、女性では「独身の自由さや気楽さを失いたくないから」と報告している。このように男性と子どもを産む女性とでは、自分の結婚感や子育てを含めた保育サービスの考えや意識は異なると考えられる。

2002年に「少子化対策プラスワン」が発表され男性の育児参加が注目された(坂爪, 2007)。坂爪(2007)と藤野(2006)は、父親の育児参加度が出生率の向上につながると報告している。男性の育児参加が促進され、保育サービスが充実することにより、少子化に歯止めがかかることが考えられる。そのためにも女性のみならず男性が必要と考える保育サービスを明らかにすることは重要であろう。伊藤ら(2011)は、中・高・大学生の「幼児への共感的応答性」は、大学生までは女子が男子より高いがその後差がなくなり、「男女平等志向性」は、女性は男性より高く男性と同様に仕事をしたと考えているものが多いと報告している。また佐野ら(2007)は、女性はフルタイム勤務である人ほど平等志向が強いと報告している。以上の報告から、大学生の男女における必要な保育サービスは、男女で異なると仮定される。

内閣府国民生活局物価政策課(国民生活局)(2003)は、就学前児童がいる保護者を対象に今後是非実施してほしい保育サービス12項目の中から3つを選択するアンケート調査を実施した。本研究では、独身若年者は、前述の12項目の保育サービスの重要度は男女によって異なると仮説を立てた。

本研究では18歳以上の独身大学生男女を対象に、前述の仮説を検証することを目的とした。

II. 方法

1. 対象者

本研究の対象者は2015年12月～2016年5月の期間中にアンケート調査に参加した満18歳以上の独身の大学生および専門学校生男女552名(男性290名、

女性262名)であった(以下、独身大学生)。彼らは京都府、大阪府、兵庫県、福井県、石川県、および愛知県に在籍した。そのうち回答に不備があった69名を除く483名(男性246名、19.3±1.1歳、女性237名、19.0±1.1歳)のデータを解析対象とした。

2. 調査方法

内閣府国民生活局物価政策課が実施した「保育者利用者アンケート」の中の「保育サービスの質と評価」の12質問項目は、保育サービス需要に関する事項と判断される(清水谷と野口, 2004)。よって、本研究では、保育サービス需要に関する要因として「保育サービスの質と評価」である12項目(1.延長保育, 2.休日保育, 3.障害児保育, 4.幼児教育(読み書き・計算), 5.英語教育, 6.園内の給食, 7.午前中の軽食, 8.子育て相談・育児支援, 9.園バスなどの移送サービス, 10.シーツや衣服の洗濯, 11.病気時の保育, 12.病後児保育)を選択した。本研究では、就学前児童がいる保護者と独身大学生とでは重要とする保育サービスは異なると判断した。観点1は、前述の12項目に関して重要と判断する項目を第1位から第5位まで選択を依頼した。次に観点2として、保育サービス需要に関する12項目は、同様に重要と仮定し、各質問に関して、対象者に実施してほしい保育サービスの程度を5段階評価(1.強く望む, 2.望む, 3.どちらでもよい, 4.望まない, 5.全く望まない)で回答を依頼した。

回答に対する虚偽の程度は、一般にライスケールが利用される。ライスケールはアンケート解答者が嘘をついていないか、質問に対して真面目に回答しているかチェックするものであり、自分の意識が反映されやすい質問内容になっている。似たような質問を分散させて回答に一貫性があるかどうかを調べる場合もある。本研究では観点1と観点2の回答から、矛盾回答と判断される該当者のデータは解析から除外した。つまり、観点1において、重要な項目と判断しなかった項目内容を、観点2において「1.強く望む」あるいは「2.望む」は矛盾し、回答に整合性がないと判断した(69名)。

3. 統計解析

本研究は、保育サービスの12質問項目の中で、男女別にそれぞれ重要と判断する1位～5位までの各項目の度数および中央値を算出し（観点1）、項目間の差をクラスカル・ウォリスのHテストを利用して検討した。有意差が認められた場合には、多重比較検定を行った。また、実施してほしい12項目の保育サービスに対する5段階評価の度数および中央値を男女別に算出し（観点2）、性差をマン・ホイットニー検定により検討した。本研究における統計的仮説検定の有意水準は5%と設定し、ボンフェローニの方法により有意水準は管理された。

Ⅲ. 結果

表1および表2は、男女別にそれぞれ重要と判断する（観点1）保育サービスの1位～5位における項目度数、クラスカル・ウォリスHテストおよび多重比較検定結果を示している。男性では（表1）、1位は、項目1「延長保育」は52.4%であったが項目2から項目9は10～25%で、項目10「シーツや衣類の洗濯」と項目11「病気時の保育」は6%程度、そして項目12「病後児保育」は0%であった。一方、最下位の5位は、項目1が10%未満、項目10から項目12は30%以上、他は10～24%であった。この度数を反映し中央値は、項目1「延長保育」が1.4位であったが、項目11「病気時の保育」と12「病後児保育」が

表1 男性が重要と判断する保育サービスの1位～5位までの各項目の度数とH検定の結果

男性：246名 項目	1位 人数（%）	2位 人数（%）	3位 人数（%）	4位 人数（%）	5位 人数（%）	中央値 M	H	P	多重比較検定 post-hoc
1 延長保育	99 (52.4)	35 (18.5)	19 (10.1)	18 (9.5)	18 (9.5)	1.4	62.2	0.000	*1>2,3,4,5,8,9,10,11,12 *6>12
2 休日保育	15 (11.6)	39 (30.2)	27 (20.9)	19 (14.7)	29 (22.5)	2.8			
3 障害児保育	16 (16.2)	14 (14.1)	28 (28.3)	19 (19.2)	22 (22.2)	3.2			
4 幼児教育	19 (15.1)	28 (22.2)	32 (25.4)	34 (27.0)	13 (10.3)	3.0			
5 英語教育	14 (17.3)	13 (16.0)	18 (22.2)	17 (21.0)	19 (23.5)	3.3			
6 園内の給食	35 (24.5)	33 (23.1)	28 (19.6)	21 (14.7)	26 (18.2)	2.6			
7 午前中の軽食	3 (10.0)	8 (26.7)	8 (26.7)	8 (26.7)	3 (10.0)	3.0			
8 子育て相談・育児支援	17 (15.7)	21 (19.4)	20 (18.5)	26 (24.1)	24 (22.2)	3.3			
9 園バスなどの移送サービス	19 (12.7)	30 (20.0)	37 (24.7)	37 (24.7)	27 (18.0)	3.2			
10 シーツや衣類の洗濯	3 (6.3)	9 (18.8)	9 (18.8)	12 (25.0)	15 (31.3)	3.8			
11 病気時の保育	6 (6.7)	13 (14.6)	13 (14.6)	27 (30.3)	30 (33.7)	4.0			
12 病後児保育	0 (0.0)	3 (7.9)	7 (18.4)	8 (21.1)	20 (52.6)	4.6			

* : p<α=0.05/12

表2 女性が重要と判断する保育サービスの1位～5位までの各項目の度数とH検定の結果

女性：237名 項目	1位 人数（%）	2位 人数（%）	3位 人数（%）	4位 人数（%）	5位 人数（%）	中央値 M	H	P	多重比較検定 post-hoc
1 延長保育	117 (57.1)	40 (19.5)	22 (10.7)	14 (6.8)	12 (5.9)	1.1	86.0	0.000	*1>2,3,4,5,6,7,8,9,11,12
2 休日保育	12 (10.3)	44 (37.9)	27 (23.3)	17 (14.7)	16 (13.8)	2.5			
3 障害児保育	16 (13.8)	26 (22.4)	34 (29.3)	17 (14.7)	23 (19.8)	3.0			
4 幼児教育	10 (10.5)	9 (9.5)	20 (21.1)	34 (35.8)	22 (23.2)	3.8			
5 英語教育	4 (6.5)	9 (14.5)	13 (21.0)	10 (16.1)	26 (41.9)	4.0			
6 園内の給食	28 (18.1)	41 (26.5)	39 (25.2)	27 (17.4)	20 (12.9)	2.7			
7 午前中の軽食	1 (5.9)	3 (17.6)	1 (5.9)	3 (17.6)	9 (52.9)	4.7			
8 子育て相談・育児支援	23 (17.4)	15 (11.4)	24 (18.2)	34 (25.8)	36 (27.3)	3.6			
9 園バスなどの移送サービス	17 (12.1)	26 (18.6)	27 (19.3)	47 (33.6)	23 (16.4)	3.5			
10 シーツや衣類の洗濯	2 (11.8)	3 (17.6)	2 (11.8)	5 (29.4)	5 (29.4)	3.8			
11 病気時の保育	7 (8.2)	17 (20.0)	22 (25.9)	13 (15.3)	26 (30.6)	3.3			
12 病後児保育	0 (0.0)	3 (6.8)	6 (13.6)	16 (36.4)	19 (43.2)	3.3			

* : p<α=0.05/12

4.0位以上で、そして項目2から項目10が、3.0に近い2.6～3.8位の範囲であった。多重比較検定の結果、男性では、項目1「延長保育」は項目6「園内の給食」および項目7「午前中の軽食」以外の項目よりも優先順位が有意に高かった。また、項目6「園内の給食」は項目12の「病後児保育」よりも優先順位が有意に高かった。

女性（表2）では、1位は、項目1「延長保育」は57.1%であったが、項目2から項目4、項目6、および項目8から項目10は10～18%、項目5、項目7、および項目11は6～8%程度、そして項目12は0%であった。最下位の5位は、項目1が5.9%、項目2～6、項目8～12は12～43%、そして項目7は52.9%であった。この度数を反映し、中央値は項目1が1.1位であったが、項目5と項目7は4位以上、項目2から項目4、項目6、および項目8から項目12は2.5～3.8位の範囲であった。多重比較検定の結果、

項目1「園長保育」は、項目10「シーツや衣服の洗濯」以外の項目より優先順位が有意に高かった。

以上の結果から、男女とも1位は、項目1「延長保育」の中央値はほぼ同程度（男性：1.4位 vs 女性：1.1位）で最も優先順位が高かった。男性では、項目2から項目10の中央値は2.6～3.8位、項目11「病気時の保育」と項目12「病後児保育」はそれぞれ4.0位、4.6位だった。女性では、項目5「英語教育」と項目7「午前中の軽食」は、それぞれ4.0位と4.7位で、他は2.5～3.8位であった。

表3は、実施してほしい保育サービスの項目の5段階評価の度数（比率）、性別度数、マン・ホイットニーのUテストの結果を示している。項目1（延長保育）は、“強く望む”と“望む”をあわせると男女とも84%以上（男性84.1%、女子は94.9%）であったが、中央値間に有意な性差が認められ、女性が男性より大きかった。項目3「障害児保育」、項目6「園

表3 保育サービスに関する12項目における5段階評価の男女別度数および中央値と検定結果

項目		1. 強く望む	2. 望む	3. どちらでもない	4. 望まない	5. 全く望まない	中央値 Me	U	Z	P
		人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)				
1 延長保育 (夕方や早朝)	男	82 (33.3)	125 (50.8)	31 (12.6)	5 (2.0)	3 (1.2)	1.8	23438	4.13	* 0.004
	女	114 (48.1)	111 (46.8)	9 (3.8)	3 (1.3)	0 (0.0)	1.5			
2 休日保育	男	50 (20.3)	120 (48.8)	50 (20.3)	21 (8.5)	5 (2.0)	2.1	28138	0.70	0.483
	女	56 (23.6)	111 (46.8)	46 (19.4)	22 (9.3)	2 (0.8)	2.1			
3 障害児保育	男	75 (30.5)	126 (51.2)	36 (14.6)	8 (3.3)	1 (0.4)	1.9	26299	2.05	0.040
	女	86 (36.3)	124 (52.3)	25 (10.5)	1 (0.4)	1 (0.4)	1.8			
4 幼児教育 (読書・計算等)	男	69 (28.0)	107 (43.5)	49 (19.9)	15 (6.1)	6 (2.4)	2.0	30022	0.61	0.549
	女	55 (23.2)	113 (47.7)	55 (23.2)	14 (5.9)	0 (0.0)	2.1			
5 英語教育	男	57 (23.2)	70 (28.5)	78 (31.7)	30 (12.2)	0 (4.5)	2.4	27816	0.90	0.360
	女	48 (20.3)	87 (36.7)	74 (31.2)	28 (11.8)	0 (0.0)	2.3			
6 園内の給食	男	90 (36.6)	117 (47.6)	33 (13.4)	5 (2.0)	1 (0.4)	1.8	26918	0.91	0.109
	女	97 (40.9)	117 (49.4)	21 (8.9)	2 (0.8)	0 (0.0)	1.7			
7 午前中の軽食	男	32 (13.0)	73 (29.7)	118 (48.0)	18 (7.3)	5 (2.0)	2.6	31640	1.74	0.080
	女	28 (11.8)	59 (24.9)	113 (47.7)	34 (14.3)	3 (1.3)	2.8			
8 子育て相談・ 育児支援	男	66 (26.8)	136 (55.3)	40 (16.3)	3 (1.2)	1 (0.4)	1.9	26260	2.09	0.036
	女	81 (34.2)	126 (53.2)	28 (11.8)	2 (0.8)	0 (0.0)	1.8			
9 園バスなどの 移送サービス	男	104 (42.3)	115 (46.7)	24 (9.8)	3 (1.2)	0 (0.0)	1.7	29365	0.15	0.880
	女	98 (41.4)	113 (47.7)	25 (10.5)	1 (1.4)	0 (0.0)	1.7			
10 シーツや 衣類の洗濯	男	57 (23.2)	84 (34.1)	78 (31.7)	23 (9.3)	4 (1.6)	2.3	32768	2.46	0.013
	女	38 (16.0)	74 (31.2)	89 (37.6)	33 (13.9)	3 (1.3)	2.6			
11 病気時の保育	男	64 (26.0)	105 (42.7)	51 (20.7)	20 (8.1)	6 (2.4)	2.1	30048	0.62	0.535
	女	56 (23.6)	100 (42.2)	57 (24.1)	24 (10.1)	0 (0.0)	2.1			
12 病後児保育	男	59 (24.0)	108 (43.9)	69 (28.0)	7 (2.8)	3 (1.2)	2.1	30327	0.82	0.412
	女	44 (18.6)	117 (49.4)	63 (26.6)	13 (5.5)	0 (0.0)	2.1			

*: $\alpha/12=0.05/12=0.004161234384.132281380.70$

内の給食], 項目 8「子育て相談・育児支援」, および項目 9 の「園バスなどの移送サービス」は男女ともに“強く望む”と“望む”をあわせると 80～90%で, いずれの項目も性差は認められなかった。項目 2 の「休日保育」, 項目 4 の「幼児教育(読み書き・計算)」, 項目 11 の「病気時の保育」, および項目 12 の「病後児保育」は, 男女とも“強く望む”と“望む”をあわせると 65～72%でいずれの項目も性差は認められなかった。項目 5「英語教育」と項目 10「シーツや衣服の洗濯」は, 男女ともに“強く望む”と“望む”をあわせると 47～57%, また項目 7「午前中の軽食」は 36～42%で, いずれも性差は認められなかった。

IV. 考察

1. 観点 1: 1 位～5 位までの優先順位

本研究では独身大学生男女における保育サービス 12 項目の中で男女別にそれぞれ重要と判断する 1 位～5 位までの項目の度数および中央値を算出した。全ての保育サービス項目の中で, 項目 1 の「延長保育」は男女ともに優先順位評価において最も高かった(中央値: 男性 1.4 位, 女性 1.1 位)。また, 重要と判断する保育サービスの 1 位～5 位における優先順位評価は男女ともに有意差が認められ, 多重比較検定の結果「延長保育」は, 男性では, 項目 6「園内の給食」および項目 7「午前中の軽食」, 女性では項目 10 の「シーツや衣服の洗濯」を除く全ての保育サービス項目よりも高かった。男女雇用機会均等法の施行以降, 女性の就労率が上昇し, 女性の社会進出が強まったことや, 男性と同様あるいはそれ以上の業績をあげることで管理職へと昇進する女性が増加したことがその背景として挙げられる(佐々木ら, 2007)。一方, 平成 24 年度版子ども子育て白書では, 現代の日本社会は女性が子育てしながら就業できる環境が整っていないことを報告している(内閣府, 2012)。また若年世代では結婚し, 親から独立して生活していくためには, 子どもができて働く, あるいは働かなければいけない経済状況である。以上のことが影響し, 男女とも「延長保育」が高かったと考えられる。「園内の給食」および「午前中の軽食」は, 女性のみ「延長保育」と有意差が認められた。女性は男性に比べて子どもの食事を保育サ

ービスの中で重要視していないことが示唆された。

項目 6「園内の給食」の中央値は, 男女とも 2.6～2.7 位, 項目 12「病後児保育」の中央値は, 男性 4.6 位, 女性 3.3 位だった。「園内の給食」の優先順位は男女とも同程度であるが「病後児保育」の優先順位は男性より女性が高い傾向にあり, 男性においてのみ項目 6 と 12 の間に有意差が認められた。子どもが病気やケガの時の対処方法は, 母親が仕事を休むことで対処している家庭が第 1 位であった(福山市役所, 2009)。伊藤ら(2000)は, 母親は子どもが病気の時, 職場の理解が得られないため, 多くの悩みを抱えながら就労している現実があると報告している。

内閣府国民生活局物価政策課(2003)によると, 就学前児童がいる保護者を対象にした結果では, 12 項目の内, 最も実施してほしい項目は, 「病気時の保育」および「病後児保育」であった。「延長保育」はほとんどの保育施設ですでに実施しているので要望が少なかったと報告している(清水谷と野口, 2004)。本研究の結果では, 男女とも第一希望として「延長保育」を選択し, 「病気時の保育」および「病後児保育」は男女とも 70%以上の者が 3 位から 5 位を選択した。大学生は, 実際に子どもがいないので, すでにほとんどの保育施設で実施している「延長保育」の現状を知らずに要望した可能性が考えられる。

本研究では, 独身大学生が考える必要な 12 項目の保育サービスの重要度は, 男女によって異なると仮説をした。「延長保育」に関しては男女ともに最も優先順位が高く, 仮説は棄却された。「園内の給食」および「午前中の軽食」は女性のみ「延長保育」と, 「病後児保育」は男性のみ「園内の給食」と, そして「シーツや衣服の洗濯」は男性のみ「延長保育」とそれぞれ有意差が認められた。これらに関しては, 仮説は採択されたと判断される。

2. 観点 2: 5 段階評価

観点 1 の優先順位評価の結果から 1 位～3 位までの選択された項目は男女とも「延長保育」, 「休日保育」, および「障害児保育」であった。4 位と 5 位は男性が「幼児教育」, 「病後児保育」で, 女性は「病後児保育」, と「午前中の軽食」であった。5 位以下の項目は「英

語教育」,「園内の給食」,「子育て相談・育児支援」,「園バスなどの移送サービス」,「シーツや衣服の洗濯」および「病気時の保育」であった。

5段階評価において12項目の中で、項目1「延長保育」は有意な性差が認められたが、その他の項目はいずれも性差は認められなかった。「延長保育」は観点1の優先順位評価では、男女ともに第1位で、観点2の5段階評価においても男女とも84%以上の者が「強く望む」および「望む」を選択し、女性の要望が多かった。中学生男女の子育てに対する考え方の調査報告では、保育の授業を男子は「一般的な常識」、女子は「自分の将来の問題」として捉える者が多いと報告している(伊藤ら, 2011)。また中学・高校生の「男女平等性志向」は、男子よりも女子において高いと報告している(伊藤ら, 2011)。本研究の結果からも先行研究と同様に、独身大学生女性は、「延長保育」を男性より現実的な「自分の将来の問題」と考え、将来子どもができて仕事も続け、時間外でも安心して預けたいと考えているので、女性は「延長保育」を要望する傾向が高かったと考えられる。

項目2「休日保育」、項目11「病気時の保育」および項目12「病後児保育」は、男女の65%~70%程度の者が「1. 強く望む」および「2. 望む」を選択し、有意な性差が認められなかった。項目2「休日保育」は観点1の優先順位評価では、男女とも第2位を選択した者が多いことから、独身大学生は、男女ともに休日でも子どもを預けて自分の時間を大事にしたいと考えていることが示唆された。「病後児保育」は、観点1では男女とも一人も1位を選択しなくて、第5位であった。以上の結果から、観点2において「延長保育」を除いた項目では、重要度に関する保育サービスの捉え方に性差がないことが示唆された。

項目3「障害児保育」は、「強く望む」と「望む」をあわせると男女ともに80%以上が必要な保育サービスと捉え、性差はみられなかった。現在の幼稚園や保育所では保育ニーズの量的拡大と多様化が進み、発達に何らかの困難がある子どもへの対応が大きな課題とされている(西木と小川, 2015)。先行研究では独身大学生を対象に保育サービス需要を検討した報告はほとんどなかった。就学前児童がいる保育所の保護者

を対象とした調査結果では、「障害児保育」は今後実施してほしい保育として要望している者は、僅か1.7%であった。自分の子どもが障害者でなければ「障害児保育」を重要視しないと判断される。一方、独身大学生においては、男女とも85%以上が「障害児保育」を今後必要なサービスとして捉えていることが示唆された。

「病気時の保育」および「病後児保育」は男女ともに60~70%が要望する保育サービスであった。独身大学生はまだ子どもを育てた経験はないが、客観的な視点で「病後児保育」や「病気時の保育」を今後必要な保育サービスとして捉えていることが明らかになった。

本研究では「園内の給食」は、「強く望む」と「望む」をあわせると男女ともに85~90%で、午前中の軽食」は約40%程度だった。「園内の給食」は男女とも80~90%以上が要望しているが、「午前中の軽食」は男女とも60%程度が必要ないと考えている。

本研究結果から独身大学生が特に重要と考える項目は、男女ともに「延長保育」,「休日保育」および「障害児保育」で、「延長保育」以外のすべての保育サービスに性差はなく、男女同様に重要視していることが明らかにされた。

本研究では18歳以上の独身大学生は前述の12項目に対する保育サービスの重要度は異なり、男女によっても異なると仮説を立てた。仮説は「延長保育」の性差に関してのみ採択され、女性は男性より「延長保育」を重要としていた。それ以外の保育サービスでは、性差はなく仮説は棄却された。

V. まとめ

12の保育サービス項目の内、「延長保育」は独身大学生男女とも最も要望が高く、「延長保育」に対する要望は、男性では「園内の給食」および「午前中の軽食」以外の項目より、女性では「シーツや衣服の洗濯」以外の項目より高い。

独身大学生男女は「延長保育」,「休日保育」および「障害児保育」を望み、「延長保育」以外の保育サービス項目の要望に性差はない。

文献

- 阿部智恵子, 若林芳樹 (2014) 市町村合併にともなう保育サービスの变化: 石川県かほく市と白山市の比較. 日本都市学会年報, 48: 185-192.
- 藤野敦子 (2006) 夫の家計内生産活動が夫婦の追加予定子ども数へ及ぼす影響—マイクロデータによる検証—. 人口学研究, 3: 21-41.
- 福山市役所 (2009) 福山市次世代育成に関するニーズ調査-調査結果報告書-, (<https://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/uploaded/attachment/2091.pdf>) (参照2017年8月10日)
- 伊藤葉子, 倉持清美, 堀内かおる (2011) 男子校中学・高校生の「保育教育に関連する意識」の調査: 共学校との比較検討. 日本家政学会誌, 62 (2): 125-131.
- 伊藤智子, 瀧川すみ子, 玉田隆 (2000) 保育所に我が子を預ける保護者への意識調査: 子どもの病気と小児医療について. 小児保健研究, 59 (3): 424-431.
- 厚生労働省 (2013) 結婚に関する意識, 71-72, (<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/13/dl/1-02-2.pdf>) (参照2017年8月10日)
- 厚生労働省 (2015) 少子社会への対応~子育て支援施策を中心に~現下の政策課題への対応, 厚生労働白書, 180-183, (<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/10/dl/02-02-04.pdf>) (参照2017年8月10日)
- 内閣府国民生活局物価政策課 (2003) 保育サービス市場の現状と課題—「保育サービス価格に関する研究会」報告書—, (http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_1167182_po_honbun.pdf?contentNo=1&alternativeNo) (参照2019年3月2日)
- 内閣府 (2012) 平成24年版子ども・子育て白書, (<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2012/24webhonpen/index.html>) (参照2017年10月10日)
- 西木貴美子, 小川圭子 (2015) 保育者が考える「障害児保育の専門性」に関する研究—KJ法を用いたスモールグループディスカッションによる検討—. 四天王寺大学紀要 59: 609-622.
- 坂爪聡子 (2007) 男性の育児参加は少子化対策として有効なのか? 人口学研究, 41: 9-21.
- 佐野まゆ, 高田谷久美子, 近藤洋子 (2007) 大学生における性役割志向によるライフコース観の比較. Yamanashi Nursing Journal, 6 (1): 45-52.
- 佐々木睦子, 内藤直子, 徳毛有希子 (2007) 0~3歳児を持つ就業母親のパートナーへ望む内容と育児休業へ思い. 香川県母性衛生学会誌, 7 (1): 20-26.
- 清水谷論, 野口靖子 (2004) 介護サービス・保育サービス市場の経済分析. 東洋経済新報社, 東京, pp.92-95.

